様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２５５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2018
課題番号：２６７８０１３０

研究課題名（和文）アダム・スミス以後の経済学と倫理――エディンバラを中心に――

研究課題名（英文）On Economics and Ethics in Edinburgh after Adam Smith

研究代表者
荒井　智行（Arai, Tomoyuki）

下関市立大学・経済学部・准教授

研究者番号：７０６３４１０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本年度の研究実績として，研究会・学会報告5回と学会誌への論文投稿1本があげられる。デュガルド・スチュアートとコンドルセの「完全可能性の哲学」を比較検討し，その成果として，学会報告（荒井智行「D. スチュアート『政治経済学講義』の解釈とフランス・エコノミスト哲学からの影響」，マルサス学会大会，2018年6月）を行った後で，スチュアートの完全可能性の哲学とチュルゴーやコンドルセ等のフランス・エコノミストのその哲学について比較考察した。2018年度内に学会誌（荒井智行「デュガルド・スチュアートとコンドルセの「完全可能性」の哲学」，『マルサス学会年報』第28号）に論文を投稿した（受理済み，印刷中）。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来，デュガルド・スチュアートは，『人間精神の哲学要綱』第2版（1802年）以降において，コンドルセの「完全可能性の哲学」を批判したと考えられてきたが，本研究では，『ブリタニカ百科辞典』第５版補巻に所収された論文「ヨーロッパにおける文芸復興以来の形而上学，倫理学および政治学の発展についての全般的展望」（1815-1821年）の中で論じられたフランス・エコノミスト哲学へのスチュアートの批評から，スチュアートがエコノミスト哲学を批判したわけではなく，むしろ擁護していた点を明示した。このことは，スコットランド啓蒙末期の道徳哲学がフランス哲学といかに関連していたのかを示す意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）：　This study illustrated Dugald Stewart’s defence of Condorcet’s philosophy of the human mind, comparing their writings. Stewart found himself in trouble in 1794 because of his positive remarks about Condorcet’s moral philosophy in The Elements of Philosophy of Human Mind published in 1792.
For Stewart, the philosophy of ‘perfectibility’ was the key to connecting his moral philosophy with the philosophy of human mind. This paper examined their mutual philosophy of ‘perfectibility’ in their writings. Especially, I attempted to explain the significance of Stewart’s political view of Condorcet’s The Life of Turgot referred to in chapter three of The Dissertation. With regard to this point, I illuminated the fact that Stewart did not necessarily criticize Condorcet’s philosophy of ‘perfectibility'. As this research result, I submitted a paper to The Annual Bulletin of the Malthus Society, no. 28.

研究分野：経済学史・経済思想史

キーワード：デュガルド・スチュアート　コンドルセ　完全可能性の哲学　人間精神の哲学　フランス・エコノミスト　T.R.マルサス　スコットランド啓蒙　文明社会

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アダム・スミス以後の産業革命に向かいつつある 19 世紀前半のブリテン社会は，産業構造の変化と労使の対立の激化を背景に，スミスの同感理論および経済論だけでは通用しえなくなったことで知られる．一般には，そうした経済社会の変化の只中で，舞台がエディンバラ（スミス）からイングランド（マルサス，リカードウ）へと南下することによって，経済学は発展したと考えられている．

本研究において特に取り上げるデュガルド・スチュアートの研究の重要性については，近年，国際的に注目されている．それは，*European Journal of History of Economic Thought* や *Journal of History of Political Economy* 等の国際的に有名な学術誌に，スチュアートの研究が大きく取り上げられるようになってきており，スチュアートの経済学が後の時代に与えた影響や彼の経済学の方法論的意義について，国内外において示されるようになってきた。

しかし奇妙なことに，スチュアートの経済学が注目されるようになってきたにもかかわらず，彼が 10 年にわたる大学の講義の中で，どのような点を重視したのかといった実態を解明する研究はほとんど行われてこなかった．その結果，スチュアートが貧困や教育等の政策を重視した経済学を打ち立てたにもかかわらず，彼は楽観的な自由貿易主義者であったという認識が広く流布されてしまっている．要するに，現状では，スチュアートの『政治経済学講義』の内容が十分に明らかにされていないにもかかわらず，スチュアート経済学が 19 世紀初頭のブリテンにおいて果たした役割や影響力だけが高く評価されている．

２．研究の目的

本研究の目的は，デュガルド・スチュアートの『政治経済学講義』や道徳哲学の諸著作の内容分析により，エディンバラを中心にスコットランド経済学の特徴を明らかにしていくことである。本研究は，このような研究目的を果たすために，研究期間内に達成すべき具体的な研究目標として以下の４点を掲げる．(1) デュガルド・スチュアートの『政治経済学講義』の基本構造を再検討し，その中で論じられた人口，国富，貿易，金融，貧民救済，教育についてそれぞれ明らかにする。また，スチュアートの『人間精神の哲学要綱』やその他の哲学関連の書物についても考察し，彼の道徳哲学の一端を明示する。(2) スチュアートの経済思想に関する研究により，アダム・スミス以後の経済学の展開において，貧困と教育が重要な要をなしている点を明示し，貧困や教育を重視するスコットランド経済学の発展過程を明らかにする．(3) 18 世紀のスコットランド経済学の流れからデュガルド・スチュアートの経済思想と道徳哲学の特徴を考察する。特に，スチュアートの救貧思想における経済学と政治学との関連，ならびにスチュアートとコンドルセの人間精神の哲学について比較検討する。これらの検討を通じて，スチュアートの政策思想の特徴を抉り出す。(4) スミス以後の経済・社会の変化を正確に理解するためには，その時代背景や関連領域について精査していく必要がある．そこで，18 世紀末以降のスコットランドの経済・社会変動の推移に焦点を当てながら，その時代の貧困の増大の持つ意味やスコットランドとフランスにおける人間精神の哲学の推移を明らかにすることである。

以上の点から，本研究では，時代背景や道徳哲学も含めてデュガルド・スチュアートの経済思想の全容を可能な限り明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

アダム・スミス以後，経済と倫理との関係を重んじるスコットランド経済学の展開を明らかにするために，以下の 4 点をその研究計画・方法の特徴とする．(1)．経済学史や経済思想史に隣接する諸分野の文献や資料はもとより，デュガルド・スチュアートの経済思想や道徳哲学に関する国内外の学術誌や多くの文献を扱い，これらを考察する。一次資料を用いた文献の解明に力点を置く本研究では，エディンバラ大学図書館所蔵のデュガルド・スチュアートの経済学講義を聴講した学生が執筆したこの講義の『ノート』やスコットランド国立図書館所蔵のスチュアートに関わる一次資料を用いる。これらの一次文献・一次資料を扱いながら，本研究を遂行する。そのほかにも，デュガルド・スチュアートに限らず，チュルゴー，コンドルセ等のフランス・エコノミストの諸著作物やアーサー・ヤング等の思想等とも関わらせながら研究を遂行する。(2)．(1) の資料や文献の考察を通じて，個別の論点についての研究内容をより精緻化させていく．またこれと並行して，本研究の個々の内容の問題点を明確化させるために，所属研究機関の研究会を活用しながら，内外の研究員の参考意見を受ける．(3) 本研究で明らかにすべき論点を整理しながら，マニュスクリプトの資料分析を進めながら論文を作成する。(4)経済学史学会や国際学会での報告を基にして，単著書の出版や学会誌への論文投稿によって，研究目的を達成する。

４．研究成果

本研究では，デュガルド・スチュアートの『政治経済学講義』（以下，『講義』と略記する場合有り）や彼の道徳哲学の諸著作の考察を通じて，彼の経済思想ならびにスコットラ

ンド経済学の特徴の一端を明らかにした。本研究では，スチュアートの貧民救済論の１つである穀物取引に関する議論，18 世紀のフランス啓蒙思想において功績を遺したコンドルセとスチュアートの道徳哲学に特に焦点を当てることにより，従来の研究では示されなかった経済学史・経済思想史上の重要な意味と意義を明示した。本研究により得られた成果の位置づけとインパクトは以下の通りである.

本研究では，デュガルド・スチュアートにおける精神哲学，人口，穀物貿易，救貧，教育等についてこれまで考察してきた内容を再検討しながら，よりいっそう研究を発展させることでもあった。スチュアートの経済思想におけるこれらの幅広い主題は，相互に関連し合っている。本研究に取り組む以前から，これらの主題については，それぞれ研究を積み重ね，本研究の土台を固めてきた。そして，本研究の期間内に，その内容をよりいっそう改善させることにより，単著書の刊行へとその成果を結実させた（荒井智行『スコットランド経済学の再生―デュガルド・スチュアートの経済思想』，昭和堂，総 280 頁，2016 年 2 月）。

本研究期間における代表的な研究成果として，単著書１冊、共著書３冊、論文４本、研究会・学会報告７回があげられる（https://researchmap.jp/7000000803/）。

2016 年 3 月に単著を出版した後，スチュアートの多様性論と過剰人口論については，2 つの研究成果を示した（荒井智行「デュガルド・スチュアートにおける経済学の目的と多様性－ジェイムズ・ステュアートの多様性論との関連で」，益永淳編『経済学の分岐と総合』所収， 93-123 頁，中央大学出版部 ，2017 年. ／荒井智行「D.スチュアートの過剰人口論―アダム・スミスの中国論との比較を中心に―」，『経済学史研究』（経済学史学会），査読有り，57（1），73-95 頁，2015 年）。この 2 つの研究成果は、スチュアートが論じたブリテン以外の欧州の諸外国の気候や風土や農業などの多様性の議論や過剰人口に伴う貧民救済に関わる議論について，本研究に応用し研究内容をより発展させることができた。

本研究の最終年度では，主として，デュガルド・スチュアートの穀物取引論ならびに人間精神の哲学における「完全可能性」の哲学について詳細に検討した（荒井智行「デュガルド・スチュアートとコンドルセの「完全可能性」の哲学――久保真氏の書評へのリプライと筆禍事件のスチュアートの真意を中心に」，『マルサス学会年報』，第 28 号，印刷中（受理済み））。この研究成果は以下の 2 点にまとめられる。

（１）デュガルド・スチュアートは，『政治経済学講義』の中で，貧民救済として，国民銀行，孤児院，工場学校，監獄の改善など，さまざまな政策論を論じた。そのなかでも，凶作時に人々に食糧を供給するための公共の穀物倉庫の設置は，彼にとって経済学上の重大なテーマであった。なぜなら，彼において，凶作や食糧飢饉は，アダム・スミスが主張した国際的な自由貿易だけでは必ずしも解決できないと考えられたからであった。その背景には，そうした緊急事態において，貧民の生存を守るためには，小麦を一定期間保管できる穀物倉庫が不可欠かどうかをめぐって激しい論争があった。18 世紀末以降のブリテンにおいて，公共の穀物倉庫の設置の是非をめぐって，アーサー・ヤング等の人物のほかに，ブリテンで発行された『スター新聞』や『モーニング・クロニクル』においても大きく報じられていた。デュガルド・スチュアートは，『政治経済学講義』の中で，これらの両新聞の論説も含めて，そうした論争について詳しく検討した。

本研究では，18 世紀末以降の公共の穀物倉庫の設置をめぐる論争下において，デュガルド・スチュアートの穀物取引論を考察することにより，彼が，『講義』において，明快な立場を示さなかったものの，公共の穀物倉庫の設置について必ずしも擁護せず，私的な穀物倉庫の設置の可能性を探っていた点を明らかにした。ただし，彼が，公共の穀物倉庫の設置を明確に批判しなかったことから，その真意については，『講義』以外の諸著作物，例えば異なる年度の彼の『講義ノート』や『学生ノート』とを関わらせながらさらに詳しく検討していかなければならない。本研究では，『講義』と『学生ノート』における穀物倉庫の設置の議論の記述の相違などを比較・検討したが，アーサー・ヤングの諸文献を始め，異なる各年度の彼の講義ノートの検討が必要であると判断するに至ったため，『講義』における彼の穀物倉庫論の考察のみにとどめることにした。その点で，アーサー・ヤングの経済思想やこれらのマニュスクリプトを用いたスチュアートの穀物倉庫論の検討については今後の急務の研究課題でもある。

しかし，公共の穀物倉庫の設置の是非をめぐって，スチュアートがヤングの農業委員会に注目した点やスミスの自由貿易論だけでは必ずしも解決できない貧困問題について注意を払った点については，これまでの研究よりも研究を進展させた。

（２）本研究では，デュガルド・スチュアートとコンドルセの「完全可能性」の哲学について詳細に比較考察することにより，アダム・スミス以後の道徳哲学の系譜の一特徴を明らかにした。これまでの研究では，両者の人間精神の哲学の類似性，あるいは，スチュアートが，科学や産業の発達を背景にして，コンドルセの人間精神の哲学を擁護したと論じられてきた。本研究では，筆禍事件を背景にして，スチュアートがコンドルセの道徳哲学を批判するようになったとする一研究者の主張について，それとは異なる見解を明示した。その考察内容と研究成果は以下の通りである。スチュアートの著作物の中でコンドルセの名が示されている著作はほとんどない。しかし，スチュアートの著作集において，索引も含めて決して十分に編集されていない。そのため，どの著作にコンドルセやフランス

啓蒙思想家について論じられているのかはすぐに判明できないのである。そこで，本研究では，スチュアートの道徳哲学の全著作物を隅から隅まで一字一句徹底的に読み解きながら，全著作集におけるコンドルセも含めた彼らへのスチュアートの言及の有無を精査した。その結果，特にフランス啓蒙思想について論じられているのが，1815-1821 年に刊行された『ブリタニカ百科辞典』第５版補巻に所収された論文「ヨーロッパにおける文芸復興以来の形而上学，倫理学および政治学の発展についての全般的展望」（この論文はハミルトン版『著作集』の第１巻に収められていることから，以下，『学問史』と略記）の第 3 部「18 世紀の倫理・政治哲学の進歩」であることが分かった。この第 3 部は，近年の印刷の発明と出版物の普及を要として，商業社会の発達を通じて人々の理性や学問の進歩をもたらす効果について論じられたものである。すなわちそれは，1792 年に出版された『要綱』の中で，同様の観点から，印刷物を通じた知識の普及が人間精神に与える効果について論じられた内容と重なるものである。特にここで注目に値するのは，この『要綱』初版において，十分に触れられなかった 18 世紀のフランス哲学が世に与えた影響の大きさについて，『要綱』初版とは異なり，何も臆することなく論じられていたことであった。

　そのほかにも，これらの点と関わらせながら，スチュアートの『人間精神の哲学要綱』とコンドルセの『人間精神の進歩史』ならびに『チュルゴーの生涯』における「完全可能性」の哲学を比較検討した。本研究では，『学問史』におけるコンドルセやフランス啓蒙思想家たちへのスチュアートの論述を手がかりにしながら，フランス・エコノミストの道徳哲学はもとより，スチュアートがコンドルセの道徳哲学について必ずしも批判していなかった点を明らかにした。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

（１）荒井智行 ‘ Dugald Stewart on Education in His Political Economy: The Perspective of Political Economy in the Early Nineteenth Century Scotland ’ , Discussion Paper, No.228, Institute of Economic Research Chuo University, 1-19 頁，2014 年 5 月。
（２）荒井智行「デュガルド・スチュアートの経済学研究とその意義――アダム・スミス以後のスコットランド経済学研究――」，『経済学論纂』（中央大学），第 55 巻第 2 号，75-99 頁，2014 年 11 月。
（３）荒井智行「D.スチュアートの過剰人口論――アダム・スミスの中国論との比較を中心に――」，『経済学史研究』（経済学史学会），第 57 巻第 1 号，73-95 頁，2015 年 7 月 。
（４）荒井智行「デュガルド・スチュアートとコンドルセの「完全可能性」の哲学――久保真氏の書評へのリプライと筆禍事件のスチュアートの真意を中心に」，『マルサス学会年報』，第28号，印刷中（受理済み）。

〔学会発表〕（計７件）
（１）荒井智行「デュガルド・スチュアートの人口思想――スミスの中国論との比較を中心に」，日本イギリス哲学会関東部会／慶應義塾大学，2014 年 7 月。
（２）荒井智行 ‘ Dugald Stewart on Education: The Perspective of Political Economy in the Early Nineteenth Century Scotland ’ , History of Economic Thought Society of Australia Conference／Auckland university，2014 年 7 月 。
（３）荒井智行「地金論争期におけるジェフリ，ホーナーとマルサス」，経済学史学会大会／滋賀大学，2015 年 5 月 。
（４）荒井智行 'Lectures on Political Economy at the East India College in the Nineteenth Century: T. R. Malthus, R. Jones, and J. Stephen', History of Economics Society Conference ／Duke university (USA)，2016 年 6 月 。（共同報告者：益永淳氏）
（５）荒井智行「東インド・カレッジにおけるマルサスの経済学講義 1806－1834」，経済学史学会大会／徳島文理大学，2017 年 6 月。
（６）荒井智行「D. スチュアート『政治経済学講義』の解釈とフランス・エコノミスト哲学からの影響」，マルサス学会大会／尾道市立大学，2018 年 6 月。
（７）荒井智行「ヘイリベリ・カレッジにおける経済学講義の制度化と『インヴェラリティ・ノート』の再考－India Office Record の資料分析を手がかりに」，経済学史学会西南部会／長崎大学，2018 年 11 月。

〔図書〕（計４件）
（１）荒井智行　担当:「D.スチュアートの反応」（154 頁），「ヘンリー・ブルーム」（242 頁），「フランシス・ジェフリー」（265－266 頁），マルサス学会編『マルサス人口論事典』，昭和堂，2016 年 2 月。
（２）荒井智行『スコットランド経済学の再生――デュガルド・スチュアートの経済思想』

（総 280 頁），昭和堂，2016 年 2 月。
（３）荒井智行「地金論争期におけるジェフリー，ホーナーとマルサス――ホーナーの金融思想に与えたマルサスの影響を中心に」，113－139 頁，補論（198－202 頁），附録：マルサス，エディンバラ・レヴュアーの翻訳），柳田芳伸・山崎好裕編 『マルサス書簡のなかの知的交流――未邦訳史料と思索の軌跡』，昭和堂　2016 年 11 月。
（４）荒井智行「デュガルド・スチュアートにおける経済学の目的と多様性――ジェイムズ・ステュアートの多様性論との関連で」，93-123 頁，益永淳編 『経済学の分岐と総合』，中央大学出版部，2017 年 1 月。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。